

コミュニティ FM の番組制作と災害復興・地域防災に関するアクション・リサーチ(継続)

代表研究者 渥美公秀 大阪大学大学院人間科学研究科 教授
共同研究者 石塚裕子 (公財)ひょうご震災記念 21 世紀研究機構 主任研究員

1 はじめに

本研究は、東日本大震災で壊滅的な被害を受け、ようやく復興過程に進みつつある岩手県九戸郡野田村において、昨年度、開局準備中のコミュニティ FM 局における住民参加型の番組の制作過程に参加して展開してきたアクション・リサーチ(2017 年度)を、その過程で得た現場のネットワークを通じてさらに進展させ、より被災地復興に寄与する成果を得ようとするものである。具体的には、昨年度の実績を踏まえて、次の 2 点において発展的な課題に取り組むアクション・リサーチを展開した。

(1) 地域へのアイデンティティが高まる番組の制作からコミュニティ・アーカイブへ: ラジオ番組のオープンアーカイブ化

昨年度における番組作成の経験、および、その困難の改善を踏まえて、さらに番組数を増やした。ただし、単純に増やすのではなく、昨年度冒頭に行ったアーカイブ研究会の成果を踏まえて、住民は出演者として関わりだけでなく、地域として何を記録し、記憶していくのかを考えていくコミュニティ・アーカイブ(e.g., Cook, 2013; 佐藤・甲斐・北野, 2018) の構築へと発展していけるように制作過程を改善して取り組んだ。

(2) 地元中学校との共同によるアーカイブの利活用を経た番組制作へ: 生徒による番組制作のアクション・リサーチ

昨年度の研究で協力を仰いだ小学校教員との協議を経て、震災を地震の体験として記憶し、昨年度制作したラジオ番組のアーカイブを視聴している中学 1 年生の生徒を対象として、「地元を調べる学習」と連携し、その成果発表会を介した番組制作を実施することによって、地域へのアイデンティティ強化、復興・防災の促進へと繋げるアクション・リサーチを推進した。

ここでは、両者を一括して報告し、コミュニティ・アーカイブの観点から、コミュニティ FM の番組制作が災害復興・地域防災にどのように貢献しうるかということ考察する。まず、先行研究については、昨年度から大きな学術的転換はないため、最新の研究成果に言及しつつも、基本的には昨年度に行ったレビューを微修正し、再掲する。

コミュニティ FM は、地域に根ざした公共性(小さな公共圏)を形成・維持・発展させる可能性をもったメディアとして捉えられてきた。公共性の創生・維持・変容とその機能については、ハーバーマス(1994 原著 1990)による市民的公共圏の議論に端を発し、その範囲や構成主体などについて、多様な議論の経緯がある(例えば、Carran & Gurevitch, 1991)。最近、北郷(2015)は、コミュニティ FM に関連する公共圏の議論を整理し、コミュニティ FM を「住民自らの参加と創造を伴うコミュニケーション」を醸成するメディアとして位置づけ、小さな公共圏の確立に向けた方略に関する議論を展開した。また、同様の立場から、国内外の様々な事例も報告されている(例えば、松浦・川島, 2010)。

一方、災害研究においては、コミュニティ FM は、臨時災害放送局に代表されるように、緊急時に地域に即した情報を受発信するメディアとして注目を浴びることが多い(北郷, 2015)。しかし、災害復興過程におけるコミュニティ FM については、その必要性が阪神・淡路大震災当時から議論され、東日本大震災以降は、各地で研究会も開催されている(江幡, 2016)ものの、十分な研究の蓄積がないのが現状だという点に大きな変化はない。例えば、臨時災害放送局からの移行に関する運営上の諸課題(一例として、臨時災害放送局の際に得られた緊急支援的な財政・人的支援が、移行時に皆無になる可能性)が指摘されており、それを凌駕する方略の必要性も指摘されているが、未だ範例となるべき事例を追った研究は乏しいのが現状である。

災害復興過程に関する社会科学的な研究は、国内では、2004 年の新潟県中越地震を 1 つの転機として、また、アメリカでは、2005 年のハリケーン・カトリーナを契機として、徐々に蓄積されつつある。例えば、宮本・渥美・矢守(2012)は、災害復興過程における外部者の役割に関して、外部者の介入による地域の身体的な知の言語化が、地域の内発的復興を促進することを事例研究によって示し、その事例を理論的に整理している。また、2004 年新潟県中越地震からの復興について、比喻(metaphor)を交えた長期的な復興過程に関する

る報告もなされたところである (Atsumi, Seki, & Yamaguchi, 2019)。一方、東日本大震災については、岩手県野田村における地域の諸団体・組織に動向について事例研究と理論的考察が蓄積されつつある(李・渥美, 2014, 2015, 2016)。アメリカでは、ニューオリンズ周辺の復興について、社会的資本と人口回復に関する実証的な研究 (Aldrich, 2012) や、社会階層、エスニシティ、諸団体のネットワークなど多様な観点から実証的・理論的研究 (Brunnsma, Overfelt, Picou, 2007) も公刊されている。中国では、2008年四川大地震からの復興について特徴的な動きが見られることがようやく日本に知られるようになったところ(林・渥美, 2018)であって、未だ本研究に資する実証的・理論的情報とはならないようである。一方、防災教育に関する研究は、防災に関心のある人々から、防災に関心のない人々をも防災行動へと導く様々な手法が開発され、実践が蓄積されており(例えば、渡邊, 2001; 矢守・諏訪・船木, 2007)、理論的には、減災学として体系化する試みも生まれつつある(矢守・宮本, 2016)。また、阪神・淡路大震災25年を前に、国際的な動向を踏まえて、これまでの防災に関する理論的枠組みを整理する試み(例えば、ひょうご震災記念21世紀研究機構, 2019)が緒に就いたばかりである。海外でも、復興期を視野に入れた学校場面での防災教育の拡張(例えば、Lai, Esnard, Lowe, & Peek, 2016)など多様な展開が見られる。

復興過程、防災行動ともに研究が進展しつつある中で、それらを統合的に考察する研究は見当たらない。そこで、本研究は、コミュニティFMを通じて、こうした既存の研究を通貫する視座を得ることを目的とした。コミュニティFMには、背後に制度的”障壁”が存在することは事実だとしても、今一度、従来の理論的研究を発展的に継承し、災害復興研究・防災教育研究における現状を総合的に把握し、さらに、アーカイブ機能などの多様な知見を取り込み、具体的な復興事例を丹念に追うことが必要な段階にある。

2 研究方法

本研究は2つの方法で展開した。まずは、昨年度に把握した災厄に関するアーカイブの動向を踏まえ、代表研究者が発災直後から災害ボランティアとして救援活動を行った岩手県野田村において、復興に向けて住民有志が取り組んでいる「のだむラジオ開設準備会」、および、野田村役場の復興展示室担当者と協働しながら、被災者等の震災の記憶や伝承に関するラジオ番組を追加制作し、これまでに制作した番組とともに、オープン・アーカイブ化した。次に、制作したラジオ番組をアーカイブとして活用する試みとして、野田中学校1年生が取り組む「地域を調べる学習」と連携し、その成果発表の場である生涯学習発表会の場を介して、中学生による番組制作(および、そのアーカイブ化)を行い、地域アイデンティティの醸成、復興・防災の促進を図った。なお、アーカイブは、野田村が開設した復興展示室で保管、視聴できるようにした。

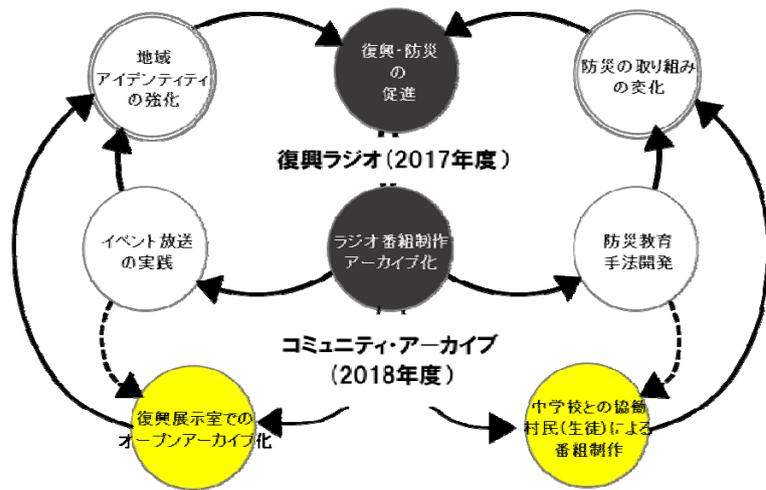


図1 研究の構成

3 結果

3-1 ラジオ番組のオープン・アーカイブ化

(1) 最近の傾向(昨年度成果)

最近では、アーカイブの評価・選別はアーキビストといわれる専門家だけでなく、市民が参画してアーカイブを構成していく手法 (Community Archive) が日本でも注目されてきた(例えば、せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター(わすれん!)」)。ここで重視されるのは、災害時におけるマスメディアによる報道と、市民が体験していることの乖離への実感

から、当事者の視点で記録を残すことである。

(2) 岩手県野田村における東日本大震災アーカイブの状況

東日本大震災では、復興構想7原則に「大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する」と提言され、震災デジタルアーカイブの構築をはじめ、震災遺構の保存、活用、震災復興祈念公園の整備などが取り組まれている。

岩手県野田村では、2018年3月に津波記念碑が建立され（写真1）、2019年3月に復興展示室がオープンした（写真2）。また、居住制限区域に整備された都市公園内の休憩施設にも震災当時の様子や復興過程の資料が展示され、一部に震災遺構も残されている。

津波記念碑は、最も被害が大きかった地域の町内会が解散することをきっかけに、亡くなった住民の鎮魂と後世への伝承を願って記念碑の建立が発議された。行政との協議を経て、地元の郷土史グループを中心とした住民有志が発起人となって協賛金を募り建立されたものであり、整備過程から住民による住民のための伝承施設となっている。

復興展示室は、村役場主導で整備されたが、地元の高校教員、外部支援者（筆者ら）、行政担当による検討会が設置され、協議を経て2019年3月に開館した。地元の工業高校生による備品の制作、外部支援団体が作成した模型が展示されるなど、多様な関係者の協力により完成した。当該施設は、緊急避難所スペースを活用した空間であることから、展示は固定化されたものではなく、入れ替え可能な構造となっており、今後、住民による活用、展示の充実、更新が期待される。



写真1：津波記念碑と都市公園



写真2 復興展示室

(3) のだむラジオ開局準備会の概要

のだむラジオは、2011年12年に地元住民と災害ボランティアの有志によりコミュニティラジオ放送研究会として発足した。きっかけは、東日本大震災である。停電のためにテレビから情報が得られない中で、ラジオの役割を再認識し、行政からだけでなく住民自らが災害時に情報提供、発信の必要性を感じ、コミュニティラジオが必要だと地元住民が感じたからである。2012年、2013年の2ヶ年は、地元有志と災害ボランティア、震災復興のコミュニティについて学ぶ大学生により、8月の夏祭りにイベント放送を実施した。その後、開局をめざした本格的な活動への機運が高まり、「開局準備会」を2013年12月に村民有志で設立し、活動理念を「野田村のための野田村村民によるラジオ」とした。

活動としては村民が集まる夜市や季節行事の会場、仮設住宅集会所など様々な所で放送を行い、2014年度には、県域放送局による地域限定の試験放送事業にも参画した。のだむラジオ開局準備会は4年目を迎えたあたりから、ようやく村民の活動へと広がりを見せ、単に災害時の情報伝達手段としてのラジオではなく、村民自身が村での暮らしぶりや歴史文化を見つめなおす機会となり、災厄の教訓を記憶し、村の復興、自らの未来を語り発信するツールとしてのラジオを創ろうとしてきた。

しかし、2018年2月に「のだむラジオ祭」を開催して以来、ラジオ局開設への動きは沈静化してきた。開局に向けた安定した資金と地元の人材の不足が主たる理由である。コミュニティラジオは、コミュニティからの資金獲得が基本であるが、そのコミュニティが小さく、さらに、復興が進んだとはいえ、未だその途上にあることから資金を得ることが困難である。その結果、地域の人材を安定して雇用できる場とはならず、通常のラジオ局としての開設という目標は一旦棚上げとし、ネットラジオ、イベントラジオ、そして、アーカイブ(復興展示室)に提供する番組制作の場という機能に限定して活動を継続することとなっている。現時点では、ネットラジオに関する検討が始まったところであり、イベントラジオとしては地元商工会が主催する行事での放送担当、アーカイブとしては野田村の復興展示室への音源提供を行っている。

(4) オープン・アーカイブ

本研究の協働の相手方であった「のだむラジオ開局準備会」の活動が沈静化したため、当初予定していたネットラジオの活用を見直しを余儀なくされた。しかし、筆者らを委員として野田村役場の震災資料展示室企画委員会が立ち上がり、その中で、昨年度および今年度に制作した番組を展示することができるようになった。具体的には、展示室に設置されたiPadにすべての番組が納められ、展示室を訪れた人々は番組を選んで聴くことができる。ただ、現状では、iPadだからこそ可能な映像とのリンクや、番組のセキュリティ対策などに時間を要しており、現時点では一般公開に至っていない。

3-2 村民(生徒)による番組制作のアクション・リサーチ

昨年度までに制作した多くの番組のうち、本研究が関与して制作した3番組(昨年度報告書参照)に加え、今年度は村民インタビューによる2番組、野田中学校1年生の総合的な学習との連携による2番組の計4番組を制作した。

村民インタビューについては、これまで筆者らが長年に渡り信頼関係を構築している村民数名にヒアリングを実施し、直接的な被災経験をした村民の中から、現時点で経験を語ることができる人、伝承するにふさわしい人物を推薦してもらい番組を制作した。一人目は、壊滅的な被害を受けた野田漁港の漁業振興の功労者であり、これまでに4度の津波を経験している長老O氏である。O氏には、筆者らが野田村で実施しているフィールドワークの授業において何度も協力を得て、津波の経験を語っていただいていたが、改めてアーカイブとして記録する趣旨を伝え、再度協力を得た。二人目は、地元の郷土史会の会長であるH氏である。H氏とも、これまでに何度も会っているが、東日本大震災の経験を中心にじっくりと話を聴くのは、今回が初めてとなる。

野田中学校1年生の総合的な学習との連携番組は成果発表会の記録を中心に取り組んだ。この中学校1年生は、昨年度、本研究事業でラジオ番組の活用を試みてもらった学年である。

(1) 村民インタビューによるラジオ番組

制作した2番組の対象者の概要および語られた内容は表1に示すとおりである。なお、番組はインタビューの録音データを、のだむラジオ開局準備会の技術担当が編集し作成している。

0氏は昭和8年(1933年)3月3日の昭和三陸津波、昭和35年(1960年)5月23日のチリ地震津波、昭和43年(1968年)5月16日の十勝沖地震津波と東日本大震災の4回も津波を経験している。東日本大震災では、0氏は避難する途中で津波高3mという情報が入ったが、今回はもっと大きいと感じ、より高いところへ避難するよう周囲の者に声をかけたと言った。

昭和三陸津波の時は、流された民家があったが、村民がいち早く壊れた家の柱や屋根の資材を回収し高台に再建した様子を雄弁に語った。一方で今回の震災では村が主体となって復興が進められ、漁業施設も道具も震災前より良くなったが、肝心の漁業就業者が減少していると語り、憂慮していた。また、明治29年(1896年)6月15日の明治三陸地震津波を経験した0氏の父は、津波で妹を亡くし、自身も津波に流された経験話し、0氏は聞いていたという。明治29年時点で0氏の自宅は、現在の高台ではなく、堤防の近くにあったといい、明治三陸地震津波を経験し、集落の多くの住宅が現在の高台に移転したという貴重な語りがあった。

H氏は震災当日の様子を鮮明に記憶しており、いち早く避難し村を一望できる高台から津波襲来の一部始終の様子を見ていた。「港内の船が木の葉のように陸上に打ち上げられた。」「(町内が)『ああ湖になったな』と思いました。でも(家が)流されたとは思っていないんです。本当に。」と津波のリアルな様子や、自宅を津波で失った者の当時の意識を語り、経験していない者にも自宅を失う悲しみが伝わる内容であった。

また、H氏の曾祖母は13歳で明治三陸地震津波を経験し、曾祖母が生き残ったから今の自分が存在し、津波がH氏にとって郷土史研究の柱の一つになっていると語った。しかし、昔は火災が多く、震災の記録の資料が失われていることを残念だと述べた。しかしH氏の家で伝わる「津波の時は川を渡るな」という教えや、村が指定する避難場所(愛宕神社境内)ではないところ(八幡神社)へ、逃げた村民の証言などを記録し、後世へ語り継ぐ必要性を訴えた。

0氏、H氏に共通するのは、東日本大震災以前の地震、津波の記憶、教えの大切さを述べ、村民の経験の記憶を記録していくことの重要性が語られている。各家の教えてとしてだけでなく、地域の記憶として活用していくためには、今回のような記憶を記録することが有用であると言える。

さらにH氏は、津波記念碑建立を発議した当人でもあり、記念碑建立の経緯についても詳しく語った。語られたことは、現時点ではどこにも記録されておらず、本番組は、記念碑に込められた村民の想いを後世に伝える貴重な記録となった。

表1 制作したラジオ番組概要

	元漁師(議員)の0氏	郷土史会会長H氏
対象者の概要	村の漁業の功労者であり、大正13年生まれの93歳の長老。漁業者が多く住む新山地区在住。	元行政職員で地元の郷土史会の会長を務めている。自宅は被害が最も大きかった村の中心市街地に位置し、自宅を失う。下肢が不自由。
実施日	2018年12月2日	2018年12月2日
収録時間	筆者ら(71分)	筆者ら(104分)
番組時間	約28分	約20分
主な内容	・震災当日の体験談 ・過去の津波の経験と伝承について ・復興について	・震災当日の体験談 ・先祖からの教えについて ・記念碑建立の経緯について

(2) 野田中学1年生総合的な学習との連携による番組制作

昨年度、ラジオ番組の活用を試みてもらった、当時、野田小学校6年生だった生徒たちは、今年、野田中学校に進学した。震災当時、保育所の年中組で、震災の記憶が本人の記憶として残る最後の学年と言われていることもあり、引き続き今年度も協力を依頼した。

野田中学校1年生の生徒は、総合的な学習の時間をつかって、「野田村の良さを語る人になろう」をテーマに、村の歴史と村おこしに関する講演会、遠足学習、野田村の特産品に係る仕事をしている人への取材を行い、2019年2月の生涯学習発表会で報告を行った。

本研究との連携としては、生涯学習発表会をラジオ番組風を実施し、それを録音することと、発表会後に再度、番組制作に協力してもらった。発表会後の番組制作では、プロのラジオアナウンサーの協力を得て、進行役を務めてもらった。生涯学習発表会では、野田村の特産品に係る仕事に注目した活動を紹介した。具体的には、バイオマスパワー、ふるさと納税（行政）、野田塩、南部福豚、野田焼、マリンローズ玉川、漁師彫り、海産物の8テーマの発表が行われた。その中で、発表後の番組制作にも協力してもらった野田焼と海産物に関する語りを発表会の記録とその後の番組制作を比較する形で分析した。

その結果、野田焼を取材した班は、発表会の中ですでに「Iさんはすごいと思いました。」「野田焼をもっと広め、多くの方に知ってほしいと思いました。」と自分たちの感想をしっかりと述べている。さらに発表後の番組制作では、アナウンサーとの対話により「とことん一直線」、「作っていることも好きなのかなと思いました。」といった、より豊かな表現で生徒たちが感じとったことが言語化されている。一方、海産物の班は、発表会では「～そうです。」「～おっしゃられていました。」と終始、報告としての語りであったが、番組制作ではアナウンサーが「印象に残ったことは?」、「どう思う?」と尋ねることにより、「すごいと思った。」「感動した。」と生徒自身の感想が語られた。

表2 語りの一部

	生涯学習発表会での語り	発表会後の番組制作での語り
野田焼	<p>「Iさんは、自分の作品で自然への畏敬の念を示していきたいとおっしゃっていました。」</p> <p>「Iさんは、作品をひとつずつ手に取り、見た目や使い心地を試しているそうです。慣れ親しんだものが野田焼だったらうれしいし、誇りや自信が持てるとおっしゃっていました。」</p> <p>「Iさんは、土にこだわり、自然を大切にしている気持ちがあって、野田焼は野田が誇るべきものだと思います。自分が好きなことを仕事にして、夢を語れるIさんはすごいと思いました。野田焼をもっと広め、多くの方に知ってほしいと思いました。」</p>	<p>(野田焼の焼き物をみてどうでしたか)</p> <p>「今までにみたことがないデザインの器だったり、自然というか風のような感じがした。」</p> <p>(泉田さんはどんな印象の人でしたか)</p> <p>「好きなこと、とことん一直線というか、まっすぐな人だと思いました。」</p> <p>「こだわりを持っていて、野田焼自体も好きだし、作っていることも好きなのかなと思いました。」</p>
海産物	<p>「Tさんは東日本大震災でご自身の大切な船をなくされ、家族を守るためにどんな仕事でもするという覚悟をされたそうです。そんな絶望感の中でも希望という言葉が胸にいいことがあると信じて荒海ホタテをつくっていたそうです。」</p> <p>「Kさんは震災当時、漁業を再開するのは無理だと思ったのですが、(中略)みんなの協力と努力のおかげで今は津波があったことを忘れるくらい、年々、右肩あがりです。」</p> <p>「野田村の復興について、漁師として浜から良くしていきたいという想いを持っていて、野田村全体で復興するよう一体となって頑張ってきたとおっしゃられました。」</p>	<p>(印象に残ったことは)</p> <p>「震災があった後、野田村の人のため、家族のために頑張った話がすごいと思いました。」</p> <p>(荒海団という名前は どう思う)</p> <p>「努力の証みみたいな感じで、自分たちで頑張っていますよという想いが込められているような感じがする」</p> <p>「荒海団は震災後に結成されたチームだけど、グループでワカメやホタテの養殖を再開させて、協力と努力で出荷量が年々右肩あがりです。」</p> <p>(漁師として浜から良くしていきたいという言葉がすごい。浜から津波が来たんだよね? その浜から良くしていこうと言えるのは凄いなと思った。)</p> <p>「やっぱり話している中で、一番、浜が大変だったけど、一番被害が大きかった浜から良くしないと復興できないという想いに感動しました。」</p>

* () 内はアナウンサーによる発言を示す。

(3) 考察：貴重な記録、そして、モノログからダイアログへ

昨年度の研究では、ラジオ番組がアーカイブとして活用できる可能性、またそのアーカイブが、地域アイデンティティを醸成するツールとして十分な価値を持つことを確認していた。特に番組制作は、住民自身による災害の伝承手段として主流である手記や語り部活動とは異なり、第三者となるインタビュアーとの対話から新たな語りが生み出される点に着目してきた。

村民インタビューによる番組制作では、昨年度とは異なり、いわゆるインタビューの記録を編集して番組を制作するという手法をとった。その結果、多くの対話の中から、貴重な記憶を発見することができ、当事者による当事者のためのアーカイブズへと成長していく可能性も確認された。

野田中学1年生総合的な学習との連携による番組制作では、手記や語り部と同類ともいえる発表会での報告内容と、アナウンサーの進行による番組制作での語りを比較することで、対話による語りの成長や豊かさを確認することができた。

手記や語り部は、当事者から聴き手への一方通行であり、モノログとなりやすいが、番組制作では当事者と聴き手の間に進行役となるアナウンサーやインタビュアーが存在することでダイアログ（対話）となる。これまでのアーカイブでは、写真や手記などが多数を占め、インタビューなどのダイアログ（対話）の記録は非常に少ないことがわかっている。調査手法としてアクティブ・インタビューなど、聴き手と語り手の相互行為による語りの活性化の重要性については既に指摘されているが、アーカイブの収集技法として、ダイアログ（対話）の重要性は、これまで指摘されてこなかった。本研究がめざすコミュニティ・アーカイブにおいては、よりダイアログ（対話）が有用ではないかという新たな仮説が生まれ、今後の課題としたい。

4 総合討論：コミュニティ FM を介した災害復興へのツールとしてのコミュニティ・アーカイブ

昨年度の研究からは、コミュニティ FM が、緊急時だけでなく、復興過程においても地域住民のアイデンティティ強化に貢献しうることが示唆され、また、コミュニティ・アーカイブとしての機能をもつことから、次の災害に向けた防災過程において番組の活用が可能であることが認められた。本年度は、その成果をもとに、住民が主体となって進めて行くコミュニティ・アーカイブの作成へと進めることができた。まず、村民インタビューによる番組制作では、インタビュー記録を編集して番組制作を行ったが、対話の中から、貴重な記憶を発見することができ、当事者による当事者のためのアーカイブズへと成長していく可能性が確認された。次に、野田中学生との連携による番組制作では、手記や語り部と同類ともいえる発表会での報告内容と、アナウンサーの進行による番組制作での語りを比較することで、対話による語りの成長や豊かさを確認できた。

ここでは、本研究を取りまとめるにあたり、コミュニティ・アーカイブをキーワードに本研究の知見と意義を整理する。まず、アーカイブは静的な集積物ではない。アーカイブへの集積は、その対象の選択、整理、保存などの過程が動的であり、アーカイブの利活用については、利活用の目的、環境などに応じて動的な対応が求められる。こうした動的なアーカイブ（アーカイビング）について、アーカイブを作成、維持、利活用する主体に注目し、アーカイブを巡る運動が社会にもたらす意義を射程に入れた議論としてコミュニティ・アーカイブの議論がある。本研究でも実地調査を行ったせんだいメディアテークの「3がつ11にちをわすれない」プロジェクトを推進した佐藤・甲斐・北野(2018)は、コミュニティ・アーカイブの特徴を次の4点に整理した。

1. 公的なアーカイブや国家の歴史において、無視されていたり、誤解されていたり、周縁化されていることに対して、自分たちで博物館やアーカイブを作ろうとしていること
 2. 自分たち自身のことばで自分たちの物語を語ろうとしていること
 3. コミュニティがアーカイブを管理することによって、何を保管し、何を破壊し、それらをどのように記述し、どのような条件の下でそれらの記録にアクセスできるのかについての力をもつことができること
 4. それによって、自分たちがどのように表象され、集合的・公的記憶のなかでどのように構築されるのかについて、一定程度のコントロールが可能になること
- 1, 2は当事者性の高い記録の重視、3, 4は記録の利活用方法の検討に見られる協働と整理することが

できる。佐藤ら (2018) は、さらに、こうしたコミュニティ・アーカイブを、イリイチ(1973, 訳 2015)のコンヴィヴィアルな道具になり得るとしている。すなわち、コミュニティ・アーカイブを作っていく活動そのものが、「専門家に占有されてしまった技術」を「よりよく生きるための道具に転換させる」営みであり、個人が周囲の事物や環境との間に、また周囲の人達との間に、自立しながらも相互に関わり合うことで、ともに生き活きとしている状態を作り出すことにつながる。コミュニティ・アーカイブはそのための道具(コンヴィヴィアルな道具)として位置づけられている。

佐藤ら(2018)の「手持ちの素材を使って、ブリコラージュ的に、DIY 的に、草の根活動的にアーカイブを作っていく試行錯誤」にこそ、アーカイブをコンヴィヴィアルな道具にしていく近道があるという指摘をもとにすれば、本研究の成果を野田村の復興展示室にアーカイブしていったことは、コミュニティ・アーカイブへの運動として位置づけられよう。上述のコミュニティ・アーカイブの要件に照らせば、本研究では、1. 2 (当事者性の高い記録) については、ある程度達成できたと考えられる。すなわち、ラジオ番組という枠組みそのものは「のだむラジヲ」が設定し、教員がそれを受容し、プロのアナウンサーによる中学生の番組が作られた。また、筆者らがインタビューを行って「のだむラジヲ」の技術者に番組化してもらったものもある。確かに、筆者らを含めて外部の者が関与しているが、それは野田村の復興をともに歩む外部者としての参画である。本研究において、当事者性の高い記録が得られたと考えてもよかろう。一方、要件3. 4 (利活用における協働) は、野田村の復興展示室担当者との協議を進めているが、研究期間内に明確な利活用に向けた仕組みを作り上げることはできなかったため、今後の課題として残ることとなった。

コミュニティ・アーカイブは、手作り感があってよい。本研究の研究成果は、コミュニティ・アーカイブとして評価の高い旧山古志村木籠集落の「郷見庵」のように手作りである。一方、閲覧する場所は野田村営施設であり媒体は iPad である。来館者は、現代的なメディアから手作り感のある声を聴くことになる。過去の津波や今回の避難の実態を学ぶことができるし、地元子ども達の声で地元の特徴が伝わってくる。番組形式を取っているため、長くもない。これなら自分にもできると感じる来館者がいれば、そこから草の根的な運動が始まり、コンヴィヴィアルな道具としてのコミュニティ・アーカイブへと繋がっていくだろう。本研究が、その契機の1つとなっていくことを願うし、筆者らもそのための努力—当面は、アーカイブとなった番組の聴取システムの構築と企画展の運営などを継続していくことを野田村役場とも検討している。

コミュニティ FM の番組制作が災害復興・地域防災へと繋がることを目指してアクション・リサーチを展開した本研究は、野田村のコミュニティ・アーカイブ運動へと繋がるという成果を得た。コミュニティ・アーカイブ運動は、コンヴィヴィアリティの醸成へと繋がる運動であるのだから、まさに地域の災害復興の中核となり防災へと展開されていくだろう。本研究の研究期間内には復興ラジオというラジオ局そのものは開設されることはなかったが、ラジオ番組(形式)という電気通信媒体がコミュニティ・アーカイブを介して災害復興・地域防災に寄与することを明らかにしたことを本研究の意義として確認しておきたい。

【参考文献】

- Aldrich, D. (2012) *Building Resilience: Social Capital in Post-Disaster Recovery*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Atsumi, T., Ishizuka, Y., & Miyamae, R. (2016). Collective Tools for Disaster Recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Recalling Community Pride and Memory through Community Radio and “Picturesque” in Noda Village, Iwate Prefecture. *IDRiM*, 6(2), 1-11. DOI10.5595/idrim.2016. 0183.
- Atsumi, T., Seki, Y., & Yamaguchi, H. (2019). The generative power of metaphor: long-term action research on disaster recovery in a small Japanese village. *Disasters*, 43(2), 355-371.
- Brunsmas, D. Overfelt, & J.S. Picou (2007). *The Sociology of Katrina: Perspectives on a Modern Catastrophe*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers.
- Carran, J., & Gurevitch, M. eds. (1991) *Mass Media and Society*. A Hodder Arnold Publication.
- Cook, T. (2003). Evidence, memory, identity, and community: four shifting archival paradigms. *Archival Science*, 13, 95-120.
- 江幡平三郎 (2016) 地域活性とラジオの力！ 第5回のだむラジヲ創る会講演資料

- ハーバーマス、ユルゲン(1994). 『公共性の構造転換-市民社会の一カテゴリーに衝いての探求』 細谷貞夫・山田正行(訳) 未来社
- 北郷裕美 (2015). 『コミュニティFMの可能性:公共性・地域・コミュニケーション』 青弓社
- ひょうご震災記念 21 世紀研究機構(2019). 地域コミュニティの防災力向上に関する研究～インクルーシブな地域防災へ～ 研究調査報告書
- イリイチ、イヴァン(1973). コンヴィヴィアリティのための道具 ちくま学芸文庫 (渡辺京二・渡辺梨佐訳 2015)
- Lai, B.S., Esnard, A.M., Lowe,S.R., & Peek, L.(2016). Schools and Disasters: Safety and Mental Health Assessment and Interventions for Children. Current Psychiatry Report, 18(12), 109.
- 李永俊・渥美公秀 監修 (2014). 東日本大震災からの復興(1) 想いを支えに 弘前大学出版会
- 李永俊・渥美公秀 監修 (2015). 東日本大震災からの復興(2) がんばる のだ 弘前大学出版会
- 李永俊・渥美公秀 監修 (2016). 東日本大震災からの復興(3) たちあがる のだ 弘前大学出版会
- 林亦中・渥美公秀(2019). 四川大地震から 10 年を迎えて:汶川地震 10 周年・芦山地震 5 周年 被災地復旧・復興学術研究会および第 2 回(2018 年)学校減災教育研究会を中心に 災害と共生,2(2), 57-64
- 松浦さと子・川島隆(2010). コミュニティメディアの未来 晃洋書房
- 宮本匠・渥美公秀・矢守克也(2012) 人間科学における研究者の役割—アクションリサーチにおける「巫女の視点」 実験社会心理学研究,52(1),35-44.
- 佐藤和久・甲斐賢治・北野央(2018) コミュニティ・アーカイブをつくろう! : せんだいメディアテーク「3 がつ 1 1 にちをわすれないセンター」奮闘記 晶文社
- 渡邊としえ(2001) 地域社会における 5 年目の試み:「地域防災とは言わない地域防災」の実践とその集団力学的考察 実験社会心理学研究,38(2),188-196.
- 矢守克也・諏訪清二・船木伸江(2007). 夢みる防災教育 晃洋書房
- 矢守克也・宮本匠(2016). 現場でつくる減災学 新曜社

〈発表資料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
コミュニティ FM の番組制作と災害復興・地域防災に関するアクション・リサーチ —Action Research for Disaster Recovery and Preparedness through Producing Community Radio Programs—	日本災害復興学会 10 周年記念・日本災害情報学会 20 周年記念合同大会	2018 年 10 月